

春

作者：朱自清

翻訳：横田勤

暗誦の部：

待って、待ち望んでいた、東の風が吹いて来た、春の歩みが近づいて来た。

一切全てが眠りから覚めたばかりのように、にこにこ目を開いた。山は潤い、水かさは増し、太陽の顔は紅くなってきた。

小さな草はひっそりと土の中から突き抜けて出て来た。みずみずしく青々としており、庭園、田畑や野原、広々と見渡す限りに満ちているのが見える。座っている者、寝転んでいる者、ぐるぐる転がっている者、ボールを蹴っている者、駆けっこをしている者、隠れんぼしている者がいる。風は軽くてやさしく、草はふわふわしている。

桃の木、杏の木、梨の木が、満開の季節に間に合うようにと、互いに譲らず競いあっている。その紅さは火のようであり、薄桃色は霞のようであり、白さは雪のようである。花の中からは甘い香りがしてきて、目を閉じると、木の上にはすでに桃や杏や梨がいっぱい実っているようだ！花の下では何百何千のミツバチがブンブンと賑やかである。大小の蝶々が行ったり来たり飛んでいる。野に一面に咲く花はいろいろで、名を持つ花も無名の花も、草の茂みの中に散らばっていて、瞳のように、星のように、きらきらとまばたきをしている。

朗読の部：

「柳に吹く風は寒くはあらず」

そのとおりで、まるで母の手があなたを撫でているようである。風は耕したばかりの土の息吹を運んでくる。それに青草の香り、さらにいろいろな花の香りが混じり合い、僅かに湿った空気の中で醸造される。鳥はやわらかな葉の間に巣をつくり、うれしくなって仲間を呼ぶが如く、澄み切った声で美しいメロディーを歌いはじめる。そよ風と流れる水がそれに呼応する。牛に乗っている牧童の笛が、この時は一日中、高らかに響き渡っている。

雨は最もありふれたものだ。一度降ると二日や三日は続く。しかし、いらだつことはない。牛の毛のように、花の芯のように、細い絹糸のように、すきまなく斜めに織り込まれているようだ。人家の屋根の上は全て、薄い煙で覆われているが如くだ。木の葉の緑は却って明るく、小さな草の青さもあなたの目に迫る。夕暮れどき、灯が灯り、わずかに薄暗い光が静けさと平和な夜を引き立たせている。農村に行くと、小さな路の上で、石の橋の辺りで、傘をさしてゆっくりと歩いている人がいる。畑で仕事をしている農夫は蓑をはおり、笠をかぶっている。彼らの草葺の家が、雨の中にポツリポツリと静かに点在している。

空には風が次第に多くなり、地上には子供が多くなった。町でも村でも、どの家々でも、老人、子供、みんなが何かに遅れまいと感じているかのように、一人一人がみんな出て来た。体を大いに伸ばし、心を奮い立たせ、それぞれの事をする。「一年の計は春に在り」、始まったばかりで、時間はいくらでもあり、希望はいくらでもある。

春は生れ落ちたばかりの赤ん坊、頭から足まで全て新しく、成長している。

春は少女のようであり、「ほら、見て、私を」とばかりに美しく着飾り、笑っている、歩いている。

春はたくましい青年のように、鉄のような腕と足腰を持ち、私達を前に向かって導いていく。

